

古典A 伊勢物語 通ひ路の闇守① 唱和用

みんなと組を合わせ、本文を読めるようにしよう。

本文	現代語訳
昔、男ありけり。	昔、ある男がいた。
東の五条わたりじ、	東の京の五条あたりに、
しつゝ恐ひて行きけり。	じつそその人目を避けて通っていた。
みえかなる所なれば、	ひそかに通う所なので、
門ものもえ入らで、	門から入るじつもでえなうで、
撞くの踏みあけたる	つゝもたちが踏み壊した
築地のつづれより通ひけり。	土塀の崩れた所から通っていた。
人づげくもあらねじ、	人通りが多くもなかつたが、
たび重なりければ、	たび重なつたので、
あるじ聞きつけて、	屋敷の主人が聞きつけて、
その通ひ路に、	その通り道に
夜じつに人を据ゑて	毎晩、人を置いて
きらせければ、	見張らせたので
行けしもえあはで帰りけり。	行つてもええなうで帰つた。

古典A 伊勢物語 通ひ路の関守② 唱和用

みんなで見直しをさせて、本文を読むものじょうじ。

本文	現代語訳
たてよめる。	そいで（男が）詠んだ歌。
人知れぬ	こっそりと
わが通ひ路の関守は	私が通う道の番人は、
宵々ごとに	毎晩
うちも寝ななむ	少しでも寝てほしいなあ。
よめりければ、	と詠んだので
いらいたう心やみけり。	（女は）たいそつひも心をつたぬた。
あるじ許してけり。	屋敷の主人は黙認した。
一糸の目に	（目の）一糸の目のかまじ
忍びて参りけるを、	じつそりも通つてつたのを
世の聞いそありければ、	世間のつねたになつたので、
せつしたちの	（目の）足たぢが
せらせ給ひけるまで。	見張られたまひつた。